

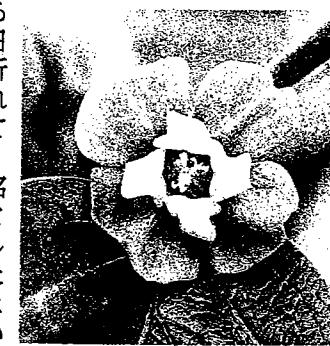
ふかまちのまど

連絡所 第八十三号
発行元 深町内会連合会
二〇〇一年四月一日
六三一三八七

ふかまちの自然への想い(6)

小林龍一郎

「深町の誇り—柿の木」
はじめて出会ったとき、深町の柿はそのいづれの種類も特別な深い味わいをもつことに驚嘆した。柿の木に私は深い思い出がある。柿の花が咲いている梅雨時、柿の木にのぼって遊んでいた。柿の木には深い思い出があり、柿の木に私は深い思い出がある。柿の木には深い思い出がある。



その面白さに夢中となり、何回もその木に登り降りした。自分の木のようないこみをしていた。繩をつけてブランコしたり、繩ばしごをつくり、自分の樹上基地を作ったりした。

全幅の信頼を寄せた花を何かと思い、それをとるたまに細い枝に移動して落下。脳震はどうでしばらく意識不明の夢地であった。その木の所有者が、私の母親をどうもしかりと怒ったよう

でした。

秋本俊之

ました。枝の先の方にある日折れて花を何かと思い、それをとるたまに細い枝に移動して落下。脳震はどうでしばらく意識不明の夢地であった。その木の所有者が、私の母親をどうもしかりと怒ったよう

でした。

秋本俊之

